

十段物語



第8回

学生柔道を牽引した寝技の鬼 岡野好太郎よしたろう

本橋 端奈子

無双流柔術と天神真楊流柔術を修行



岡野好太郎十段

岡野好太郎は明治18（1885）年4月24日、香川県小豆郡土庄村に岡野松助の長男として生まれた。幼少の頃からがっしりとした体型で力も強く、尋常小学校では後に政治家となった三木武吉ぶきちと同級生であったが、「口の達者なのは三木、腕力は岡野」と言われ、ある種際立った存在であったようである。彼は尋常小学校を卒業したのみで、後は働きながら苦勞して独習で学んだ。その勉強法は主に、新聞を端から端まで1

字残さず読んで字を覚えていくものだったという。当時を振り返り、岡野は「新聞には振り仮名がついていたので、勉強には好適の教材であった」と語っている。

岡野が柔の道を歩み始めたのは17歳になった明治36（1903）年頃のことである。その頃、高松において天神真楊流柔術の前川宗助が米穀問屋の土蔵を改造して道場とし、無双流柔術・松井三蔵らと共に柔術指導をしていた。岡野はその道場の存在を知って入門を決意し、主に無双流を学ぶこととなった。背は低いが、そのがっしりした体型から自然と柔術・柔道に興味を持ったのであろうか。この道場では、寝技を特に叩き込まれたようである。柔術を修行するには相手から咽喉を絞められることを恐れてはならない、恐れては技の進歩は無い、という教えで、絞められても耐えられるように咽喉を特

に鍛えたという。すぐに柔術の面白さに目覚め、独自に竹内流の研究などを行うなど、強くなることに没頭していった。また、高松中学校に講道館柔道の教師が派遣されてきたというのを聞き及ぶと、早速教えを請いに行き、立技の手ほどきを受けもした。³ 講道館へ入門したのはこの時で、明治39（1906）年3月30日岡野20歳であった。

同年、大日本武徳会香川県支部の演武大会が高松市において開催された。この大会で、岡野は初段の鈴江吉重を背負投で破り、その技の上達が認められ、早くも初段を許されることとなる。明治39年11月10日のことで、講道館入門から1年足らずでの初段は、岡野の技が入門当初から余程進んでいたことを示す材料となろう。そして昇段と同時に、岡野は武徳会香川県支部の助手を拝命し、⁵ここから柔道を職業として柔道一筋

の人生が始まったのである。

武徳会と武術教員養成所

この時期岡野は、最初の師である松井三蔵範士に伴われ、稽古のため京都の武徳会に上っている。香川では将来を嘱望されるような自分である、と相当な自信を持って武徳会での乱取稽古に臨んだようである。しかし、そこで初段はおろか2級程度の者にまで軽くあしらわれ、自分がどうやら井の中の蛙であった、と思いが知らされる結果となったのである。また、自分が誰よりも背が低いことも、彼を落ち込ませる一因となった。悄然とする岡野に、松井範士は「高松に帰るか」と慰めを込めて問うた。実はこの頃、岡野には陸軍第11師団輜重兵大隊の柔道教師になってほしいという依頼が来ていた。今の實力でも柔道教師としてはやっていけるであろう。しかし、このまま諦めき

れない、何とかして今日負けた連中に勝ちたいという気持ち捨て切れず、岡野は京都に残って修行を積む決心をする。そして、この年に武徳会に新たに開設された武道の専門家を育てる武術教員養成所へ第一期生として入所を果したのである。この武術教員養成所の柔道教授は、磯貝一、永岡秀一⁶らであった。磯貝は、嘉納師範から関西への講道館柔道普及の命を仰せつかり、京へ骨を埋める覚悟で赴き、今や武徳会を束ねている重鎮である。彼は武術教員養成所で育つ生徒の質によって、当時勃興しつつあった武道教育の盛衰が大きく左右されると考え、強い責任感を持って養成所の教育にあたることを決意し、岡野ら1期生の入所式の際、以下のように訓示を述べた。

社会が君達に望んでいることは、日本精神文化の指導者としての期待であって、勿論技術に秀で且つ

強いことを望むところであろうが、日常生活に於ける行為そのものが、精神文化の教導者として、恥じざるものであるかどうかを、批判的に眼を以て眺めることであろう。それ故に、君達の一挙一動そのものが、武道教育の将来性に、甚大なる影響を及ぼすものである。斯く考えると新しく生まれる教導者としての諸君の責任は、重大なものがあるばかりでなく、普通人間として、立派な教養ある社会人として、恥ずかしからざる者となるよう心掛け、精進に力めなければならぬ。

この言葉は、後々まで岡野の、人間としての指針となったという。磯貝は言葉だけでなく、これを自らも実践して模範となる人間たる様努めた。岡野も磯貝・永岡を師と仰ぎ、厳しい稽古に耐え、修行を積んでいくのであった。

岡野は、身体動作を柔らかくするためと、また技の理論を体得表現するため、永岡から柔の形と投の形を習得するようにいわれ、その稽古にも打ち込んでいた。この当時、誰も形の練習を進んでやりたがらなかったため、練習相手を探すのも一苦労であったという。しかしこの練習が、後に技の習得にも大いに役立った、と岡野は次の事例を挙げて述べている。

明治40（1907）年5月、武徳会本部の演武大会に嘉納治五郎師範が臨席した。この時が岡野と嘉納師範の初対面である。この大会中、師範は講演を行いその中で

柔道の技が本当に表現された時は、投げた者も投げられた者も、どうして投げたか、どうして投げられたか、それには気づかず終わって、はじめて気がついたものが本当の技である。

と述べた。岡野にはこの意味が全く理解できなかったという。だれでも稽古をするときは体得しようとして目標とする技に専念するので、技を掛けるときも意識しないわけが無いと考えたからである。そのまま不明に思いながらも稽古を続け1ヵ年が過ぎた。岡野は言う。

稽古が終ってから投の形の練習をしていた。裏投が思うように表現出来なため、特に裏投を練習していた。土用稽古の終わった時恒例によって試合があった。相手は柳本二段、柳本とはあらゆる機会に試合をすること10回、いつも引分になっていたが、そのときは組むや跳腰で「出るほん投げ」られた。試合は3本勝負、さらに組んだ瞬間わたくしの体は倒れていた。審判の永岡先生は一本一本勝負といわれ、試合は続けられたが引分になった。

試合が終わって同僚は、今日の跳腰は立派であったが、君の裏投も立派であった。君が熱心に裏投の練習を毎日繰り返し返してやっていた効があったと言ってくれた。柳本も、どうして投げたか投げられたかわからなかったと言った。治五郎先生の言葉の意味がそのときはっきりとわかった。

本当の技を岡野はこの時感じ取ったのであった。また、そのためには裏打ちされる何百回もの稽古が必要なことと同時に理解したという。その後、岡野は稽古で多くの者に投げられたが、決して頑張ることはせず、相手の攻撃技を研究してそれに順応して避け、進んで攻撃してくる相手の力を利用し制禦することに努めるようになった。

武徳会では、明治40年に武徳会青年演武大会において優勝を果し、明けて41（1908）年の青年演武大

会でも優勝を飾り、嘉納師範が所蔵する刀を贈られるなど、目覚ましい活躍を遂げ、次第に「岡野強し」と関西に噂される存在となっていく。それに伴い、明治41年5月には二段同年11月には三段、明治43（1910）年10月には四段へと、順調に昇段を重ねていったのである。

高専柔道と岡野

岡野はこの頃、特に寝技の研究に没頭した。身長が人一倍低かったので、寝技を徹底するように勧められたからであった。「一たび投技から固技に変化したときは、どんなことがあっても相手を立たすようなことがあってはならない。一旦固技に入ったら、相手を制しきるまで徹底的に攻める意気込みでなければならぬ」と永岡に教えられたとおり、「ブルドッグ」のように一度寝技に持ち込んだ相手は離さない、という

意気込みで研究に打ち込んでいった。岡野は寝技について以下の様に語っている。

寝技表現の際、相手が自分の攻撃を阻止しようとしたときは、その防禦を一気に突き破るべく強引に攻撃することもあり、その防禦の鋒先を避けつつ、そのまま現状を保持して攻撃の時機をうかがい、相手の防禦の隙をねらって、機を見て猛然と相手を攻撃しなければならぬこともある。誤れば反対に相手に制圧されるから、攻撃の機をとらえた時は相手を制圧するか、制圧されるかという極み立つわけで、この難関をとっさに破るよう、相手の動作に順応して間断なく攻撃しなければならぬ。自分が守勢にある場合も同様に、常に態勢挽回のチャンスを探し、絶えず工作して優勢への転位を図るのである。寝技の醍醐味といった



下富坂道場前にて。前列左端が岡野十段、左から四人目が嘉納師範

ものはこうした呼吸の中にある。¹³
 また、講道館員である以上、東京の本館を知らなくては、と永岡に勧められ、上京し一ヵ月間、講道館での

稽古も行っている。これ以降、岡野は給料の何割かを月々上京費用として貯め、毎年講道館へ必ず赴き、稽古をしている。こういった所からも岡野の律儀な一面が垣間見えるであろう。さて、その明治42（1909）年の最初の上京ことである。二月の講道館有段者月次試合に三段として出場した。岡野は松岡万次郎二段に投技と寝技で2本取り、村上邦夫三段に送足払で1本取り、更に吉田三段を上四方固と大内刈で2本取った。ここで、横山作次郎¹⁴の発案で、急遽、当日日の出の勢いであった徳三宝三段と組むこととなったのである。徳の得意技である体落を何度も避けつつ、互角に渡り合い、試合時間を何度も延長するも雌雄決せず、結局引き分けに終わった。この試合をもつて、岡野の強さは講道館本館にまで鳴り響くこととなったのである。

嘉納師範はこの試合が余程印象深

かったのであろうか、明治44（1911）年、第六高等学校の柔道教授であった今井行太郎が亡くなり、その後任人事を嘉納師範が任された際、「寝技を良くする人」という条件を受けて、師範は岡野を六校の柔道教授に推薦する¹⁶。この推薦が、岡野が生涯を学生柔道の教導に捧げる契機となったのである。

岡山の六校では、生徒らに厳しい稽古を課すとともに、自らも生徒と一緒に寝て寝技研究に励んだ。六校以外にも、岡山医専・武徳会岡山支部・岡山県警・憲兵隊・騎兵隊など、さまざまな道場の教師を兼任し、講道館柔道の普及に努めた。岡山時代の岡野のエピソードとして語り継がれているものは、岡野は大食漢であったので、とにかくものすごい量を食べる。あまりに食べるので、1ヵ月5円50銭の下宿代であったのが、ひと月に50銭ずつ値上がりし、結局

14円にまでなってしまったほどであったという。岡野もこれにはたまらず、弟を小豆島から呼び寄せ、以後は自炊生活をするようになった。風貌からも想像されるほほえましい話のひとつであろう。

大正3（1914）年、京都大学が主催となって高等学校・専門学校が対抗試合を行うこととなった。これが高専大会の嚆矢である。岡野は徹底的に鍛え上げた六校を率いて参戦し、高専大会連覇を成し遂げるなど、六校の全盛時代を指導者として支えたのである。この高専大会を機として寝技の研究が多いに進んだことは事実ではあるが、岡野は、寝技ばかりに偏重して指導したわけではなかった。寝技に偏ることでも講道館から批判が出ることを予期し、六校生徒に寝技と立技半々で試合に勝たせるなど、¹⁷特に生徒らが批判の対象にならないよう気を配ることも忘れ

なかった。また、学生生活を送ったことのない岡野は、彼ら生徒の理解に努めようとわざわざ六校の図書館に通い、彼らの読む哲学書などを読んで勉強に励んだという。この六校での教授時代が岡野にとって最も楽しい時期であった。

大正5（1916）年30歳で五段に昇段した岡野は、武徳会の演武大会にも欠かさず出席し、5年、また大正9（1920）年には優勝を果すなど、未だその強さは衰えることがなかった。そんな中、再び嘉納師範に推薦される形で、大正9年に名古屋にある第八高等学校¹⁸の柔道教授となることとなったのである。学生柔道界の頂点に君臨する六校の「優勝を目標とする烈しい稽古を軸とする部生活にこそ、自己鍛錬があり、学生柔道の充実がある」という考えから、「運動選手を養成せず²⁰」という鉄則のある八高への移籍は、岡野

にとって厳しい環境の変化となった。しかし、根気よく新しい生徒らに学生柔道の理念を育成し、八高を強豪校と言われるまでに育て上げていたのである。名古屋では他に名古屋高等商業学校や愛知県警・武徳会愛知支部などへも柔道教授として奉職し、特に名古屋高等商業学校は岡野の指導から数年にして屈指の名門校となり、遂には昭和12年の高専大会において優勝を果すまでになる。岡野は厳しい指導の中にも人物の育成を怠らなかつた。²²口数は少ないながらも的確で温かみのある指導に、岡野を慕う者も多かったという。嘉納師範、また武専時代の恩師である磯貝・永岡からの信任も厚く、この間も大正15（1926）年5月には六段、昭和8（1933）年6月には七段、昭和12（1937）年12月には52歳にして八段と、段を重ねていったことからそれは読み取れよう。

勝負は人格の閃き

昭和16（1941）年、太平洋戦争の勃発を前にして、突如文部省より「高専大会を中止せよ」との指令が発せられた。²³ それでも1年間の血の出る様な稽古をむざむざ無に出来ない、と「カイサイスキタレ」の電報が飛び交い、規模を縮小して大会は開催された。また翌17（1942）年では、とうとう戦時下の学徒統制の一環に組み込まれ、従来は各大学主催で行ってきたが、これより文部省・大日本学徒体育振興会の共催で高専大会は開催されることとなった。そしてこの大会を最後に、学徒出陣の影響により高専大会は終止符を迎えることとなったのである。学生柔道と共に半生を歩んできた岡野にとっ

野の家は焼かれた。岡野の子息である岡野勝政氏はこの時の岡野を「研究熱心な父は、柔道についての研究記録を、書棚一杯に保管していたが、それを焼いてしまった。焼跡に、武徳会本部の大会で全国優勝した時、嘉納先生から戴いた刀やメダルをひとつひとつ拾い上げている父の姿は、限りなく寂しかった」²⁴と振り返っている。

学生柔道の禁止により片腕をもちたような状態ではあったが、終戦後、岡野は郷里の小豆島へ戻り、そこで町道場を開き心機一転また柔道生活を送ることとなった。岡野を小豆島の人々は暖かく受け入れた。その町道場は六校の道場を模したものわざわざ建てて、岡野を迎えたと

いう。

昭和23（1948）年、63歳になった岡野は九段への昇段を果す。そして昭和35（1960）年には、再び

名古屋へ移り、新制名古屋大学に柔道教授として迎えられることとなったのである。既に77歳と高齢になっ

てはいたが、学生柔道への情熱は衰えておらず、熱心な指導により名大を再び強豪校へと導いている。

晩年の岡野にとつての最大の喜びは、勲五等双光旭日章を受けたことであろう。昭和41（1966）年4月、岡野81歳のことである。足を痛めていたため、夫人に付き添われての式であった。昭和天皇から親しく「おめでとう。国家のためによくやって下さった」「体を大切にせよ」との言葉をいただき、感涙にむせび泣いたという。岡野にとって、自分の人生が認められた最大の瞬間であったであろう。

岡野は高齢になってからも、道場に出る時刻までは床に伏して体力を養いつつ、死の直前まで毎日道場へ出続けていた。そして死の床にあっ

てなお、柔道の将来を案じ続けていたという。岡野は喜びの叙勲の翌昭和42（1967）年6月2日、腸閉塞によりこの世を去った。死に先立ち、講道館は岡野の功績を称え岡野に史上8人目の十段位を贈ったのである。

最後に、岡野の遺した言葉を紹介したい。

「勝負は人格の閃き― 勝負とは何等の駆け引きというものでなく、抛り所のある適当な方法で習得した後の、人格の閃きでなければならぬ」²⁵ 技を磨くのみならず、その勝負の一瞬には、平素培い養った、その人の人格の発露が不可欠である、ということである。まさに、柔道を通しての人間形成を目指した岡野にふさわしい言葉であると言えるであろう。

*引用文献は、現代漢字・仮名づかに改めた。

《主要参考文献》

- 『学生柔道の伝統』岡野好太郎著 黎明書房 昭和29年
- 「父・岡野好太郎を語る」岡野勝政 『柔道』第43巻第12号(昭和47年)
- 《その他典拠・註》
- 1 現在の土庄町
- 2 『岡山県柔道史』金光弥一兵衛著・発行(昭和33年)
- 3 「各地の話題・東海 叙勲の岡野九段」長谷川泰一著『柔道』第37巻第7号(昭和41年)
- 4 明治28（1895）年、全国・各種武道を網羅する団体として設立された
- 5 前掲註3参照
- 6 共に後の十段
- 7 『柔道範士磯貝一口述 わが七十年を語る』長谷川泰一著 赤心同盟会東海支部 昭和15年
- 8 「好きな技思い出の技」岡野好太郎著『柔道』第26巻第2号(昭和30年2月)
- 9 前掲註8参照
- 10 「青年演武大会記事」『武徳誌』第2編第8号(明治40年)
- 11 「青年大会記事」『武徳誌』第3編第8号(明治41年)
- 12 『学生柔道の伝統』岡野好太郎著 黎明書房 昭和29年
- 13 前掲註12参照
- 14 講道館四天王
- 15 略称は六枝。現在の岡山大学の前身のひとつ
- 16 「岡野好太郎先生を偲ぶ」井上剛著『柔道タイムス』第400号(昭和42年6月25日)
- 17 「高専大会と寝技」岡野好太郎著『柔道』第25巻第8号(昭和29年)
- 18 略称は八高。現在の名古屋大学の前身のひとつ
- 19 「父・岡野好太郎を語る」岡野勝政『柔道』第43巻第12号(昭和47年)
- 20 前掲註19参照
- 21 後の名古屋大学経済学部
- 22 前掲註16参照
- 23 『続・闘魂 高専柔道の回顧』湯本修治 著 日本繊維新聞社(昭和47年)
- 24 前掲註19参照
- 25 「勝負法に関する研究」岡野好太郎著『柔道』第4巻第4号(大正7年)
- 《写真典拠》
- 1、2とも講道館柔道資料館蔵